

「小僧の神様」はどんな人？

津島ネタを久しぶりに書きます。

まずは、居酒屋さん“**出逢い**”の常連客によるカラオケ大会の話から。昨年の暮れに、新年早々の開催を再び企画されたのですが、マスター(ママのご主人。魚屋さん)が風邪をひいてしまったため流会、そのままの状態になっています。

マスターと飲んでいて、志賀直哉の『**小僧の神様**』の話になりました。

あらすじは、『**広岡威吹さんのブログ**』から拝借します。

小僧の神様は志賀直哉が大正八年に執筆した小説。

あらすじはこんな感じ。

はかり屋で働く小僧の仙吉は、寿司を食べたいと思っていた。

ある日、使いに出されるが交通費の電車賃を帰りを歩く事で片道分浮かせた。

その金ですし屋に入るけど、高く食べられなかった。

それを見ていた貴族院議員の男。小僧に同情する。

別の日、はかりを買おうとして男は偶然小僧と再会する。小僧は気がついていない。

男は行きつけの店を使って間接的に小僧へ寿司をおごってやった。

しかし小僧は男を神様だと考えた。なぜなら小僧から見ると偶然が多すぎたからだ。すしを食べたいと知っていた、しかも行ってみたいすし屋だった、さらに自分の働く店まで知っていた、という理由で。

ところが寿司を奢った男は、寂しいような嫌な気持ちになってしまった。という話。

聞き覚えがある作品名ですが、内容はすっかり忘れていました。

この作品は、寿司をおなか一杯食べる事ができて喜ぶ小僧の純真さと、同情から寿司をおごったことによって逆に自己嫌悪に陥る男の葛藤を対比して描いています。

マスターが今、焦点を当てているのは、“**小僧の視点**”。

小僧にとっては、自分のことをなんでもわかっている男はまさに神様、ということになります。

マスターは言います。

「小僧さんが可哀そうでなあ、泣けて来るわ。勘定を払えると思ってすしを手にとったんだけど、店員に値段を言われてあわてて戻すんだ。いっぺん手に取ってから戻すんだぞ。食べたい、食べたいと思っとった寿司が食べれんと帰ってくだわ。本当に可哀そうでなあ。」

以前の「かさ地蔵」の時と同様、マスターの目は潤んでいます。

「この頃は、涙腺が弱なってまってなあ。」



「自己満足による行為のせいで偽善性を感じ、己の行為を後悔する。」というように、男の行為を批判的に捉える書評が多くあります。金持ちの気まぐれが、後に葛藤を招くわけですから。

そうかもしれません。

例えば、部下を飲み誘っても心の葛藤はありません。「ごちそうさまでした。ありがとうございます。」と言われるのと、「あなたは神様です。」と呼ばれるのは、確かに違います。

これは、“**男の視点**”。

しかし、「小僧の神様」は、偽善家のイヤな人なのでしょうか。

小僧さんを可哀そうに思っごちそうしたけれど、「神様」と呼ばれて戸惑ったのかもしれませんが。誰も、自分のことを絶対視する人(小僧)に向くと、己(男)はそれほどの存在かと自問してしまいます。たまに、履き違える人はいますが…。

子供は、素直に感謝する。

大人には、それができない。

だから、葛藤が生れるのでしょうか。

だとしたら「小僧の神様」は、本当の神様ではなくてもよいように思います。普通の人で。

素直に感謝する対象を、小僧さんは「神様」と呼んだだけです。

“**小僧の視点**”で、この小説を読む。

これが普通はできません。どうしても“**男の視点**”から見てしまいます。

還暦を過ぎて「小僧さんが可哀そうでなあ。」と泣ける大人が、身の回りにいらっしゃいますか。

また、言います。

マスター、恐るべし。